

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2015年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	現代心理学部・教授	中村 秀之 印
研究課題	戦争の社会的記憶と大衆文化 ——映画とミュージアムにおける特攻隊表象の連関	
研究期間	2015年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 497,000円 / (採択金額) 497,000円	
研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)		
<p>本研究は、特攻隊を題材とする映画作品と特攻隊を記念するミュージアムとの複雑な相互的連関の中で構築される戦争の社会的記憶を考察することを目的とした。</p> <p>本研究の基本仮説は、敗戦後現在に至る特攻隊の表象の多くは戦時下に作られた表象を原型としてそれを解釈したり変奏したりしてきたにすぎないのではないか、というものである。特攻隊のミュージアムにしても、距離を置いて歴史的現実を振り返ることよりも、むしろ過去に作られた表象をあたかも現実のものとして反復する機能を持つのかもしれない。このような仮説にもとづき、戦争の社会的記憶に関する議論を従来とは異なる水準で展開する企ての一環である。</p>		

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[特攻隊] [ミュージアム] [映画]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. ミュージアムの空間と場所に身を置くこと**

特攻隊表象に関する映画とミュージアムの相互連関を対象とする本研究の主眼は、ミュージアムの空間に実際に身を置くことだった。映画の場合、現代では映画館での観覧だけでなく DVD やブルーレイなどの視聴によって作品を見ることが多い。それは場所を限定されない営みである。しかしミュージアムの意義が、インターネットによる仮想体験が可能になっている現在であっても建築物の内外に物理的に身を置くことにあるのは言うまでもない。つまり、展示物を見るだけでなく、その空間や場所を体験することが重要である。

本研究においては特攻隊関連の次の 9 館を訪れた(訪問順)。知覧特攻平和会館(鹿児島県南九州市)、ホテル館(鹿児島県南九州市)、大刀洗平和記念館(福岡県朝倉郡)、宇佐市平和資料館(大分県宇佐市)、周南市回天記念館(山口県周南市)、呉市海事歴史科学館(広島県呉市)、鹿屋航空基地史料館(鹿児島県鹿屋市)、万世特攻平和祈念館(鹿児島県南さつま市)、筑波海軍航空隊記念館(茨城県笠間市)。これらのうち、鉄道だけでアクセスできるのは大刀洗平和記念館と呉市海事歴史科学館、鉄道からフェリーで島に渡るのが周南市回天記念館、あとはいずれも自動車を利用しなければならない。私は車を運転しないので、数少ない路線バスに長時間揺られるか、タクシーを利用しなければならなかった。これはもちろん、航空特攻に関連するミュージアムが都市部から遠い旧基地の所在地に建てられているためであり、実際に足を運ぶことで、その地理的条件を体で経験することができた。まずはこの素朴な事実を確認しておきたい。なお、各ミュージアムの立地や建物の建築的な特徴については本報告では省略する。

2. 映画からの影響

本報告の主題である映画とミュージアムの相互連関に関して、まず、館によって度合の差が大きいことがわかった。

ウェブサイトでも情報を得ることができるように、9 館のうち、ともに海軍の基地があった宇佐市平和資料館(2013 年 6 月 29 日開館)と筑波海軍航空隊記念館(2013 年 12 月 20 日開館)の 2 館は、映画『永遠の 0』(2013 年 12 月 21 日封切)と強い結びつきがある。両者とも映画の公開に先立って開館している。前者は映画製作と直接の関係はなかったけれども、撮影で使用した零戦のレプリカを映画の公開前に展示品に加えた。開館後 3 年近く経過するが、建物はプレハブの倉庫であり、数年後に本格的な平和記念館を設立する予定だそうである。後者は旧司令部庁舎が映画の撮影に使われたこともあり、その建物自体を資料館に利用している。訪れてみると、両館とも映画に関連した品物を展示品に加えていて、歴史的事実の説明は丁寧にはしているとはいえ、社会教育の施設としては、虚構と現実の差異についてより周到的配慮が必要ではないかと疑問を抱いた。

特攻隊のミュージアムとして最も有名な知覧特攻平和会館は、知覧にあった陸軍の基地から出撃した特攻隊員を慰霊することから出発しながら、現在では、全国の特攻隊員の遺族からの寄贈の品物が増えつづけ、知覧とも特攻隊とも直接の関係のない品物も展示されている。地域との結びつき以上に全国的な「特攻隊」全般のミュージアムとして観覧者を集め、すっかり観光スポットになっている。貸し出しのタブレット端末で音声解説を聞きながら展示物を見て回る形式は本格的なミュージアムであり、専属の学芸員が勤務しているとのことである。このような館の特性から、敷地内のあちこちに多様な記念碑が建てられ、その中に映画『ホテル』(2001)と『俺は君のためにこそ、死ににいく』(2007)の碑が含まれ、後者の撮影で使われた戦闘機「隼」のレプリカが屋外に展示されて記念撮影のスポットになっている。しかし、館内では売店の横に大きな映画のポスターが飾られているだけで、映画関連の展示品はない。同じ知覧町のホテル館については後述する。周南市回天記念館は徳山港からフェリーで連絡している大津島にある。興味深いことに、徳山港のフェリーの発着所の近くに映画『出口のない海』(2006)で使用された回天の実物大模型が飾られ、待合室にも映画のポスターが貼られているのに対して、フェリーで島に渡ると、港から記念館の内外に至るまで、映画との関連を示すものはまったく設置されていない。残りの大刀洗平和記念館、呉市海事歴史科学館、鹿屋航空基地史料館、万世特攻平和祈念館の 4 館には映画との関連は見られなかった。

3. 映画への影響

知覧町のホテル館は特攻隊員と交流があった鳥濱トメが経営していた食堂を復元した私設ミュージアムである。建物の玄関脇に「映画ホテルの富屋食堂」というパネルが立っている。裏手には、『俺は君のためにこそ、死ににいく』のロケ地となったことを記念する石碑もある。これらの映画との関連は、むしろ、ミュージアムから直接というのではないにしても、ミュージアムの背景となった一面が映画に影響を与えたことを示している。すなわち、特攻隊の「語り部」となった鳥濱トメの存在と彼女が語り伝えた逸話である。この点については、本研究の申請後に刊行され、貴重な先行研究となった福間良明・山口誠編『「知覧」の誕生——特攻の記憶はいかに創られてきたのか』(柏書房、2015 年)所収の論文、山口誠「「知覧」の真正性——「ホテル」化する特攻と「わかりやすい戦跡」」でも論じられている。山口氏の論文は特攻イメージの「ホテル化」という事実に着目した貴重な論考だが、映画作品についての理解が不十

研究成果の概要 (つづき)

分である点が惜まれる。例えば、特攻隊員をめぐる想像力の変化を、強い攻撃能力を誇る「鷲」から弱い「ホタル」へと整理できるという説の前半部分は、戦後の日本映画における特攻隊の表象に照らすと誤りである。また、同じ鳥濱トメとホタルの逸話を題材とする『ホタル』と『俺は、君のためにこそ死ににいく』の映画としてのスタイルとイデオロギーの違いは明らかで、この点の分析が特攻隊映画の理解に寄与するところは大きい。それは、まさに特攻隊に対する人々の意識における変化した面と変化していない面を明らかにするからである。

さらに、より一般的な問題として重要なのは、知覧を代表とするミュージアムによって特攻の「歴史」を知ることが歴史への向き合い方の支配的なモードとなっている状況を踏まえて、そのような態度と親和的な語り方を採用することで、より大きな共感を調達することを狙う映画作品が作られたことだ。それが『永遠の0』にほかならない。今回の調査に触発され、私は『永遠の0』の問題点を、これまでの同作品をめぐる議論とはまったく異なる観点から批判的に論じることができると考えるようになった。

4. 展示と歴史

特攻隊を題材とする映画作品と特攻隊を記念するミュージアムとの複雑な相互連関の中で構築される戦争の社会的記憶を考察するのが本研究の目的であった。私の仮説は、敗戦後の特攻隊表象の多くは戦時下に作られた表象を原型としてそれを解釈したり変奏したりしてきたにすぎないのではないか、というものだった。この仮説の検証に関連して、今回の調査から特に重要だと思われたことが3点あった。

第1点は説明パネルや解説ビデオの問題である。来場者の行動を観察していると、その多くは、展示品そのものに視線をこらすことよりも、展示についての説明パネルを読むことや音声解説を聞くこと、そして解説ビデオを見ることに、より多くの時間を費やしている。この点は一般の美術作品の展覧会で顕著だけれども、特攻隊のミュージアムの場合、文字資料、すなわち特攻隊員の遺書や手記、手紙などが展示の中心を占め、来場者はこれらの文字資料は熱心に読んでいる点は異なる。特攻隊員の遺書の史料的价值をめぐって行われてきた議論にはここで立ち入らないけれども、いずれにせよ考慮すべきことは、説明パネルや解説ビデオによる意味づけ、あるいはフレーミング(枠づけ)である。特に重要なのが、「特攻隊員の死が戦後の平和の礎になった」という紋切り型である。この定型は歴史的事実に照らして根拠を持たないだけでなく、戦時中に頻用された「皇国の人柱」という言い回しと同型である。要するに、特攻隊員の死を「犠牲」として肯定しているわけである。特攻隊員のおかげで戦後の平和があるから感謝する、という考え方は、戦時中に特攻隊員を「生きている神」として見送った当時の人々の態度と変わらないのではないか。このような態度こそ、フィクションの映画における同様の儀礼性——私が『ホタル』と『俺は、君のためにこそ死ににいく』の異同を分析することが重要だと考えるのは特にこの点に関わっている——と連動することで、戦時中に形成された特攻隊表象を継承することにほかならない。

第2点は展示によるアナクロニズム(時間錯誤)と呼ぶべき問題である。遺品や遺書、加えて当時の新聞記事などが、現在からの視点で相対化されずに集積され展示されることで、その展示空間に身を置いた観覧者に、いわば時間錯誤が起こるかもしれない。展示品に没入する熱心な観覧者ほど、そのような危険性がある。つまり、特攻隊が出撃してマスメディアによって美化された当時の言説空間がそこに復元され、観覧者はその中に取り込まれて同化するということである。上述した第1点と結合することで、かなり強力な「教育」的效果を発揮するのではないかと。

第3点は、そのような効果に対する抵抗の可能性とかがわっている。言うまでもないが、ミュージアムにはアーカイブの機能がある。今回の調査で私にとってはすこぶる興味深い発見だったのは、大刀洗平和記念館に展示されていた「と號空中勤務必携」という資料だった。陸軍が1945年5月に作成した特別攻撃隊員用の教本だということで、要するに特攻のマニュアルである。中でも「突撃時ノ注意」と題された項目に現れている精神主義は、特攻の本質を如実に示している。寄贈品とのことで、他の何かの文献に収録されているかどうか未確認だが、知覧特攻平和会館の壁の一隅に目立たない形で掲出されている「勅令」(特攻死による一階級特進を定めたもの)と同様、特攻隊員への感情的コミットメント——それがしばしば犠牲の肯定につながりかねない——とは異なる客観的な一次資料として、特攻の歴史を知り、展示空間の儀礼性を相対化する手がかりになるはずである。歴史を知るための空間が虚構と曖昧に結びついて儀礼の空間になってしまわないために、虚構つまり映画作品の独自性の分析とミュージアムの展示の批判的検討を総合するこの研究をさらに継続してゆく必要があることを痛感した。

※ この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①なし
- ②なし
- ③なし
- ④なし